大谷俊介先生のご逝去十余年に寄せて
『やったらいいですよ』の言葉とともに

戸名正英
株式会社アヤボ
masahide@ayabo.com
2025 年 10 月 2 日

大谷俊介先生のご逝去から、すでに十年以上の歳月が経ちました。あらためて筆を執り、先生への深い感謝と追悼の思いを記したいと思います。

私は 2003 年から 2008 年まで先生の研究室にポスドクとして在籍させていただきました。当時まだ若く、無茶な実験にも果敢に挑戦していた私を、先生はおおらかなお人柄で受け止め、常に温かく見守ってくださいました。

ほぼ毎日のように夕方から始まるお酒の席では、浴びるほどのビールや日本酒、ワインを酌み交わしながら、先生は極めてフラットに物理の核心や研究の方向性を語ってくださいました。また、原子物理学の世界的な動向やご自身のご経験をユーモアを交えてお話しくださり、その場はいつも学びと活気にあふれていました。

研究においては、当時として世界最高峰の多価イオン生成装置を駆使し、極めて高い電荷を持つイオンを引き出し、ビームラインで輸送して清浄に準備された表面へと照射し、その反応を観察することで数々の成果を挙げることができました。その背景には、先生の「やったらいいですよ」「やりすぎはよくない」といった口癖に象徴される、自由と節度を巧みに両立させたご指導がありました。私はその言葉に背中を押され、研究に夢中になって取り組むことができたのを今も鮮明に覚えています。

あれから 20 年近くが経ち、私は現在、中小企業の技術者として働いております。部下は 30 名ほどになり、個性豊かな若手の人材と日々向き合っています。その中には、このご時世らしく東南アジアから来日した労働者や、中小企業ならではの事情でまだ経験やスキルが十分に整っていない人材もおります。そうした多様な背景や能力を持つ人々を導くことの難しさを、日々痛感しています。

そのたびに思い出すのが、先生のおおらかな笑顔や人を惹きつける語り口です。さらに、あのお酒の席で語ってくださった国際情勢や黎明期の原子物理学研究のエピソードも、今の私にとって大切な指針となっています。先生のご存在は、私の研究人生のみならず、現在の職業人生にも深く根を下ろしているのです。先生を思い出さない日はないほど、今なお私の中で生き続けていらっしゃいます。

若手社員を指導するとき、あるいは会社として大きな方針を決めなければならない重要な局面に立たされるとき、私は自然と先生のお姿を思い浮かべます。研究室で私に寄り添い、時に「やったらいいですよ」と背中を押し、時に「やりすぎはよくない」と諭してくださった先生の笑顔やお言葉は、今も私の判断基準の根底にあります。困難に直面したときこそ「大谷先生ならどう振る舞われただろうか」と自問し、その答えを心の中に探すことが、私にとって大きな拠り所となっています。

先生のご冥福を心よりお祈り申し上げるとともに、いただいた教えを胸に、これからも自らを律し、精進を重ねてまいります。